

# 平成 27 年度「教職課程担当教員養成プログラム」

## 教育・研究活動報告

中居 舞子  
(広島大学)

本書は、平成 27 年度「教職課程担当教員養成プログラム」の活動報告書である。本プログラムは、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育のあり方を見直し、教職課程を担当する実践的な力を持つ大学教員を育成するためのものである。

広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻（博士課程後期）では、平成 19 年 9 月から平成 22 年 3 月にかけて、「Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」(平成 19 年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム)に取り組んだ。同プログラムは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成を目指し、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものである。

平成 22 年 3 月に同プログラムが終了した後、これまでの 3 年間にわたる活動を更に発展させる形で引き継いだのが、「教職課程担当教員養成プログラム」（以下、「教職 P」と略記）である。新たな名称とともに開始された「教職 P」は、現在 6 年目を迎えている。平成 27 年度「教職 P」の受講者は 11 名（博士課程後期院生）である。

例年と同様に、本年度も博士課程後期 1 年次生は、前後学期を通じて、2 つの授業（「教員養成学講究」と「大学教授学講究」）を履修し、教員養成制度の歴史や大学での教授法など、大学教員としての基礎的な知識を学んだ（今年度の履修率は、教育人間科学専攻 D1 の 80%であった）。

博士課程後期 2 年次生は、学内（広島大学）で前学期・後学期に各 1 回、計 2 回の教壇実習に取り組み、博士課程後期 3 年次生は、学外（他大学）において教壇実習に取り組んだ。学内外における教壇実習の概要は、次表の通りである。

表 平成 27 年度 学内外における教壇実習

実施時期	実施先	実施科目	実習生（学年）
5 月 25 日（月）	広島大学	道徳教育指導法	安喰 勇平（D2） 相馬 宗胤（D2）
6 月 18 日（水）	広島文教女子大学	幼児教育課程論	久恒 拓也（D3）
7 月 13 日（月）	広島文化学園大学	教育制度	張 磊（D3）

教壇実習は、履修生 1 名に対して、教員が 3～4 名（指導教員 1 名、教育指導を担当する TA 指導教員 2～3 名）で指導にあたる。履修生は、教壇実習をする予定の授業の TA をしながら、日頃の授業の様子や内容を把握し、指導教員の助言を受けながら教壇実習の準

備を進める。教壇実習の前後には、履修生が作成した指導計画案および授業の構想について議論をする事前検討会と、実習授業の反省を行う事後検討会が開かれる。これらの検討会には、専門分野が異なる教員や履修生が参加をするため、さまざまな授業観や教育観（時には対立も含む）に触れることができる。指導計画案や実際の授業をめぐる議論を通して、多角的な授業改善が促進される場となっている。なお、実習授業の準備（授業内容や教材の選択のみならず、実習日の調整なども含む）や実習授業の映像撮影等、教職 P の運営は履修生によって主体的に行われている。

博士課程後期 3 年次生は、教職 P の総仕上げとして「教職教育ポートフォリオ」を作成する。3 年間のプログラムを通して、自身が学んだことを振り返り、「授業哲学」あるいは「授業理念」として整理し、担当教員に提出をする。この「教職教育ポートフォリオ」は、一方的に提出して終わるものではなく、提出するまでの過程において、担当教員と履修生との間で内容の検討が重ねられ、最終的に合格と判定された者には「修了証明書」が授与される。今年度は、第 6 期生として 2 名の修了生が誕生した。

このように、単発的ではなく 3 年間をかけて、教員養成に関する知識を身につけ、継続的にプラクティカムとリフレクションを行いながら、個々の授業哲学を練り上げていく、という組織的な取り組みが、教職 P の特徴である。

さらに、上述の正規プログラムと並行して、今年度は、学外視察と共同研究を行った。教職 P では、これまでも先進的な研究や類似のプログラムの視察を行ってきた。今年度は、京都大学大学院文学研究科プレ FD の視察を実現することができた。詳細に関しては、本報告書の該当ページを参照していただきたい。

共同研究については、平成 23 年度より開始され、今年度で 5 年目となる（各年度の内容については、これまでの報告書をご参照いただきたい）。履修生が主体的にテーマを設定し、それぞれの興味・関心によってグループを編成する形で進めている。5 年目となった今年度、年度当初に話題にあがったことは、研究の継続性、また研究成果の発信についての問題であった。毎年 4 月にテーマが設定され始まる研究は、1 年の完結型であり、次年度へ引き継ぐ、というようなことは、これまで意識してなされてこなかった。あくまで自主的に始められたために、共同研究であるにもかかわらず、個々が興味のあるテーマを 1 年間探求する、という自己完結型に終止してしまっていた感がある（これは、あくまで執筆者の考えである）。そこで今年度はその課題を乗り越えるために、前年度にやり残した研究を引き継ぎ、さらに成果を積み重ねる、という形をとった。また、これまで口頭発表のみであった成果発表の方法を、論文として投稿することを試みた（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』第 64 号に掲載済）。その研究成果の一部を本報告書にも掲載している。また、今年度は、第 22 回大学教育研究フォーラム（於 京都大学）においても研究成果発表を行った（これについては、今年度で 4 年目となる）。

以上のような、共同研究から得た成果（知識、研究の方法論、そして人間関係など）が、履修生の大きな糧となり、自らの「授業哲学」や「教育理念」に繋がっていることは言うまでもない。

末筆ながら、今年度の運営に携わってくださった方々に感謝を申しあげたい。まず、ご多用にもかかわらず、視察を快く受け入れてくださった、京都大学の田口真奈先生。直前まで細やかなご配慮をいただいたために、とても充実した訪問となった。また、学外プラクティカムを受け入れていただいた広島文教女子大学の白石崇人先生、広島文化学園短期大学の黒木貴人先生。先生方のご協力なくしては、本プログラムの活動は成り立たない。最後に、本学の教職員ならびに履修生である大学院生、共同研究をすすめるにあたりご協力いただいた先生方、そのほか陰ながら応援してくださった皆さまにも心より感謝を申しあげたい。